【原著論文】

在留ブラジル人の名古屋グランパスの試合観戦における阻害要因と個人属性との関連性

太田 明李 [1)]，川西 司 [2)]，伊藤 央二 [3)]

Brazilian immigrants' constraints when attending Nagoya Grampus games and its relationships with their demographics

Akari Ota[1)], Tsukasa Kawanishi[2)], Eiji Ito[3)]

抄　録

本研究の目的は、在留ブラジル人が名古屋グランパスの試合観戦において経験する阻害要因及び、試合観戦を検討する際に経験する阻害要因と個人属性の関連性を明らかにすることであった。半構造化インタビューから 3 つの阻害要因（スタジアム環境、言葉、情報の欠如）が明らかになった。また、質問紙調査から 4 つの阻害要因（社会文化、観戦、仲間、時間）が明らかになり、「観戦」と性別、サッカー歴間の関連性が認められた。

キーワード：在留ブラジル人，阻害要因，個人属性，名古屋グランパス

Abstract

The purposes of this study were to examine Brazilian immigrants' constraints when attending Nagoya Grampus games and when considering it as well as its relationships with their demographics. Results of semi-structured interviews revealed three constraints（stadium environment, language, lack of information）. Additionally, results of the questionnaire survey revealed four constraints（social-cultural, spectating, peers, time）, in which "spectating" constraints associated with gender and soccer carrier.

Key words : Brazilian immigrants, constraints, demographics, Nagoya Grampus

1. 緒言

スポーツ観戦は我が国で行われる余暇・レジャー活動の 1 つであり、多くの人々に親しまれている。とりわけサッカーは、1993 年の J リーグ開幕以降、多くのクラブが発足し、ホームタウンの住民やサポーターによって観戦が行われてきた。名古屋グランパス（以下、グランパス）もその 1 つであり、近年は「Thanks for your support 2022 ～チケット企画～」と題して全ての来場者にチケットを割引価格で提供することや、小中高生の無料招待を実施するなどスタジアムへの集客に

1）中京大学スポーツ科学部　〒470-0393　愛知県豊田市貝津町床立101
School of Health and Sports Sciences, Chukyo University, 101 Tokodachi, Kaizu-cho, Toyota, Aichi, 470-0393 JAPAN
2）中京大学スポーツ科学研究科　〒470-0393　愛知県豊田市貝津町床立101
Graduate School of Health and Sports Sciences, Chukyo University, 101 Tokodachi, Kaizu-cho, Toyota, Aichi, 470-0393 JAPAN
3）中京大学　〒470-0393　愛知県豊田市貝津町床立101
Chukyo University, 101 Tokodachi, Kaizu-cho, Toyota, Aichi, 470-0393 JAPAN

力を入れている。また、街の魅力と地元への愛着の向上を目指す夏の一大イベントとして「鯱の大祭典」を2019年より開催し、人と人の繋がりやホームタウンとの連携を深め、グランパスを通して街全体を盛り上げるイベントにも積極的に取り組んでいる（グランパス，2022）。実際に、コロナ禍にも関わらず2020年はJリーグ最多の入場者数を、2022年はJ1リーグ平均入場者数4位（18クラブ中）を記録している（佐藤，2022）。

そのグランパスがホームタウンとする愛知県は、多くの在留外国人が居住していることで知られている。都道府県別では東京都に次いで愛知県が2番目に多く、令和4年6月末現在においては280,912人の在留外国人が居住している（出入国在留管理庁，2022）。国籍別ではブラジルが最も多く、愛知県全在留外国人の22.4％にあたる59,300人の在留ブラジル人が居住している（愛知県，2022）。さらに、グランパスのホームスタジアムである豊田スタジアムの近くには、在留ブラジル人が団地住民の約半数を占める保見団地が存在し（豊田市，2022）、団地内にはブラジル人向けスーパーマーケットやブラジル人学校が置かれている。グランパスはこの地域特性に着目し、これまで様々な在留ブラジル人向けプロモーションを導入してきた。2018年からは在留ブラジル人に特別価格でチケットを販売する「ブラジル人企画チケット」、2019年からはサンバショーやブラジルグルメを提供する「ブラジル祭り」を毎年開催している（佐藤，2022）。さらにWOVN.ioと連携し、公式ホームページの多言語化を行い、日本語、英語、ポルトガル語でのアクセスを可能としている（グランパス，2020）。グランパスは、在留ブラジル人を“グランパスファミリー”として受け入れることで、サッカーを通した多文化共生の促進と在留ブラジル人サポーターの獲得を目指している。

しかし、これらの在留ブラジル人向けプロモーションを展開する一方、佐藤（2022）は2022年に2試合を対象に行われた「ブラジル人企画チケット」において、全来場者数が23,595人であったのに対し、本企画のチケットを利用した在留ブラジル人は102人（0.4％）に留まっていたことを報告している。コロナ禍の影響を差し引いても、この結果は在留ブラジル人のサポーター獲得の取り組みに成功しているとは言い難い状況である。このような在留ブラジル人の試合観戦への消極的な態度の背景には、阻害要因が影響を及ぼしている可能性が考えられる。阻害要因とは、余暇・レジャー活動の参加やその楽しみを阻害するものや個人の余暇・レジャー活動の嗜好の形成を制限する要因と定義されている（Jackson, 2000）。また、年齢や性別など特定の個人属性との関連性が明らかにされているように（山口ら，2018；Yamashita & Harada, 2015; Tsai & Coleman, 2013）、在留ブラジル人向けプロモーションの効果が限定的であった理由は阻害要因と個人属性の関連性を考慮してこなかったことが一因である可能性が考えられる。阻害要因と在留ブラジル人の個人属性の関連性を明らかにすることでターゲットを絞ったマーケティングをすることが可能となり、より一層の在留ブラジル人サポーターの獲得に繋がることが考えられる。そこで本研究では、グランパスの試合観戦において在留ブラジル人が直面する阻害要因と個人属性の関連性について明らかにすることを目的とした。

2. 先行研究の検討

Crawford & Godbey（1987）の阻害要因理論によると、余暇・レジャー活動においては、その参加や嗜好を妨げる阻害要因が存在し、それらは個人的・対人的・構造的に分類される。国内では、マラソンイベントを対象とした阻害要因に関する研究が行われている。山口ら（2018）は神戸マラソンのボランティアが経験する阻害要因について、3要因（個人的、対人的、構造的）を基に検討を行っている。個人的阻害要因を「不安やスキル不足、ボランティア活動に対する態度といった個人の心理的状態に基づくもの」、対人的阻害要因を「家族や友人などといった他者との対人関係（相互作用）から生じるもの」、構造的阻害要因を「ボランティア活動における場所、金銭、時間などといった外的状況によって生じるもの」と定義したうえで、神戸マラソンにおけるボランティアの阻害要因の構造は3要因（個人的、対人的、構造的）18項目であることを示し、この3要因（個人的、対人的、構造的）に基づいたボランティアマネジメントを遂行することが重要であると山口ら（2018）は指摘している。また、備前ら（2016）は市民マラソンランナーが都市型市民マラソンへの参加を検討するにあたり生じる阻害要因について、特に構造的阻害要因に着目して検討を行っている。備前ら（2016）は、ランナーが直面する構造的阻害要因を「コスト」、「スケジュール」、「ロケーション」、「大会内容」の4つに分類し、そのうち「スケジュール」、「ロケーション」、「大会内容」がランナーにとって大きな構造的阻害要因になることを明らかにしている。これらの研究はボランティアやマラソン大会といった参加型スポーツ活動を対象としているが、観戦型スポーツ活動に焦点を当てた研究も行われている。Yamashita & Hallmann（2020）は、Jリーグ観戦者が経験する構造的阻害要因を「代替活動（Alternative activity）」、「スタジアム（Stadium）」、「費用（Cost）」、「アクセス

(Access)」、「天気（Weather)」の 5 つに整理して検討を行い、「費用」の項目に含まれる時間的な問題や、「代替活動」の項目に含まれる金銭的な問題が実際の観戦行動に大きな影響を与えることを明らかにし、構造的阻害要因を解消することの重要性を指摘している。

一方、都市型市民マラソン大会への参加における阻害要因について 2 要因（個人的、対人的）から検討を行った備前ら（2015）は、対人的阻害要因の「一緒に参加する人（同伴者)」に関する項目を構造的阻害要因として捉えることも可能であるとし、今日のレジャー活動が多様化する状況において、各阻害要因の項目の配置や構造を再検討する必要があることを指摘している。そして 3 要因（個人的、対人的、構造的）の分類によらない阻害要因に関する研究も報告されている。西尾ら（2013）はホノルルマラソンの日本人参加者が直面する阻害要因について、「マラソン大会に関する情報」、「観光に関する情報」、「同行者」、「安全性・文化の違い」、「経済的問題」の 6 要因を明らかにしている。伊藤・河野（2021）においても、日本人マスターズ大会参加者が経験する阻害要因を「心理的」、「身体的」、「対人的」、「金銭的」、「時間的」、「旅行的」、「責任的」、「マスターズ大会特有」の 8 要因に分けて調査を行っている。J リーグ観戦については Yamashita & Harada（2015）の研究において、探索的因子分析の結果から、「心理的（Psychological)」、「スタジアム環境（Venue Quality)」、「外的価値（Extrinsic Value)」、「スケジュール（Schedule)」、「交通（Transportation)」、「応援チーム（Supporting Team)」の 6 つの阻害要因が明らかにされている。一方、Rocha & Fleury（2017）がブラジルにおけるサッカー観戦の阻害要因と観戦意図の間の構造的関係に着目した研究では、ブラジル人が直面する阻害要因として「成功体験の欠如（Lack of success)」、「知識不足（Lack of knowledge)」、「仲間の欠如（Lack of someone)」、「費用（Cost)」、「スタジアムの場所（Stadium location)」、「テレビ／ラジオの配信（TV/Radio broadcast)」、「天気（Weather)」、「駐車場（Parking)」、「安全性（Safety)」、「座席（Seating)」、「トイレ（Restroom)」、「売店（Concession)」、「他のファン（Other fan)」の 13 要因を明らかにしている。その中でも、ブラジルのサッカー観戦では暴力行為やファンの過激な行動が頻繁に生じるため、「安全性」と「他のファン」が重要な阻害要因であり、次いでチケット代などの「費用」が試合観戦を妨げる要因になることが指摘されている。これらのように、文脈や余暇活動の特性によって異なる阻害要因に直面することが明らかにされており、先述した伊藤・河野（2021）の研究においてもマスターズ大会の参加前後での阻害要因の調査が必要であると指摘されている。本研究の対象である試合観戦についても、試合観戦中に経験する阻害要因と、試合観戦を検討する際に経験する阻害要因とでは文脈が異なるため、それらを区別して包括的に在留ブラジル人が経験する阻害要因を明らかにする必要性が考えられる。

また、これまで国内で行われてきた研究では、余暇・レジャー活動において国籍や文化の違いによって異なる阻害要因に直面することが報告されている。伊藤ら（2016）は、野外レクリエーションにおける阻害要因について、日本とカナダの文化的類似・相違点の比較検討を行っている。3 要因（個人的、対人的、構造的）30 項目を調査項目とし、日本人及びカナダ人大学生を調査対象とした質問紙調査の結果から、日本人はカナダ人よりも個人的及び構造的阻害要因に直面していることが明らかにされている。この結果について伊藤ら（2016）は、野外レクリエーションをはじめとする余暇・レジャー活動に対する日本人とカナダ人の価値意義の違いが個人的阻害要因の文化差を生み出し、施設や設備の充実度の違いが構造的阻害要因の文化差を生み出したと予測している。また、Ito et al.（2020）は余暇時間の身体活動（LTPA）における阻害要因について、日本人と欧州系カナダ人の文化比較研究から新しい類型を開発している。日本人と欧州系カナダ人を対象に実施したオンライン調査のデータを基にテーマ分析を行った結果、9 つの阻害要因（「心理的」、「身体的」、「ライフスタイル的」、「対人的」、「金銭的」、「時間的」、「責任的」、「環境的」、「LTPA 特有的」）が報告されている。これらの 9 要因に基づき、伊藤・河野（2022）はスポーツ活動を含む LTPA について、日本人と欧州系カナダ人の文化的類似性と相違性に着目して研究を行っている。こちらも日本人と欧州系カナダ人を対象にしたオンライン調査を実施し、*t* 検定による分析の結果、「ライフスタイル的」阻害要因のみ文化間で相違が見られた。欧州系カナダ人の方が日本人に比べて高い「ライフスタイル的」阻害要因を経験していることが明らかとなり、この結果の背景には、日本・カナダ間で LTPA とその他の生活習慣の関連性への認識の違いがあることが指摘されている。西尾ら（2013）の研究においても、日本人がホノルルマラソンに参加する際には、「言葉が違うので楽しめないかもしれない」や「文化が違うので楽しめないかもしれない」といった、言葉や文化の違いによる阻害要因が明らかにされている。一方、国外の研究においては、Tsai & Coleman（2013）が余暇・レジャー活動の意味、役割、重要性は文化特有なものであることを強調し、文化による余暇・レジャー活動の価値意義の違いを示唆している。彼ら

はオーストラリアに移住した中国人移民の新しい余暇・レジャー活動における阻害要因を調査し、移民が直面する阻害要因を、「社会文化的（social-cultural）」、「資源（resources）」、「対人的（interpersonal）」、「アクセス（access）」、「身体的（physiological）」、「感情的（affective）」の6つに分類している。その中でも「資源」、「対人的」、「アクセス」が余暇・レジャー活動の参加を妨げる要因としての重要度が高く、「感情的」、「社会文化的」は重要度の低い阻害要因であることが報告されている。Tsai & Coleman（2013）は、「移民に対する人種的な偏見や歴史的な考え方が、社会的マイノリティの人々に更なる阻害要因を与えている」（p. 243）と述べ、重要度は低かったものの移民特有の「社会文化的」阻害要因が生じていることを指摘している。

このように、国外では移民を対象とした余暇・レジャー活動における阻害要因の研究が行われている一方で、国内で行われてきた研究についてはその多くが国や文化を比較するものであり、日本に在住する移民を対象とした阻害要因の研究が数少なくその知見は限られている。スポーツイベントを通したイスラム系在日外国人のスポーツ・ライフを調査した上代ら（2016）の研究では、イスラム系在日外国人がスポーツを行う際に困ったこととして「時間がない」と「体力がない」に次いで「言葉（日本語）が分からない」という問題を挙げており、スポーツ活動における要望として「宗教への理解」や「多言語の使用」などを求めていた。この研究から、在留外国人はスポーツを行う際に、日本人が感じることのない問題に直面していることが窺える。特に言葉、宗教、生活様式などの社会文化的阻害要因が在留外国人のスポーツ観戦行動にも影響を与えている可能性が考えられる。

社会文化的な要因に加えて、年齢や性別などの個人的属性と阻害要因との関連性を明らかにした研究も行われている。先述した山口ら（2018）はスポーツイベントボランティアが経験する3要因（個人的、対人的、構造的）を、年齢と性別で比較している。その結果、若年層（20歳未満と20-29歳）の方が中年層（30-49歳）と高齢層（50歳以上）に比べてボランティア参加に対し個人的、対人的、構造的に阻害されていることと、女性の方が男性よりも個人的および構造的に阻害されていることが明らかにされている。Yamashita & Harada（2015）の研究においては、Jリーグ観戦者が経験する阻害要因と個人属性（性別、年齢）の関連性が指摘されている。Jリーグ観戦者が経験する阻害要因のうち、「心理的」、「外的価値」、「スケジュール」、「応援チーム」の4要因において男性が女性よりも高い値を示していた。年齢については、「応援チーム」において年齢が高いほど阻害要因を感じる傾向が明らかにされている。回答者の国籍に関しての言及はないが、J2リーグの試合観戦者を対象としており、そのほとんどが日本人であることが予想される。そのため、日本人のJリーグ観戦者において、直面する阻害要因によって性差と年齢差があることが窺える。一方、Tsai & Coleman（2013）は、オーストラリアに移住した中国人移民が新しい余暇・レジャー活動を始める際に経験する阻害要因には性差がないという相反する結果を報告している。性別や年齢のような一般的な個人属性に加えて、Matsuoka（2014）の研究では、バスケットボール観戦者のバスケットボール参加経験の違いが、観戦への態度や行動に影響を与えることが確認されている。そのため、Jリーグ観戦者においても、サッカー歴が観戦時の態度や行動に影響を与え、経験する阻害要因に差異を生み出す可能性が考えられる。このように、阻害要因と年齢や性別に関する知見は蓄積されてきているが、在留外国人のJリーグ観戦における阻害要因と個人属性（年齢、性別、サッカー歴）の関連性に焦点を当てた研究は行われていない。

以上の先行研究の検討より、本研究では以下の2つのリサーチクエスチョンを設定した。

RQ1：在留ブラジル人がグランパスの試合観戦においてどのような阻害要因を経験しているか。

RQ2：在留ブラジル人が試合観戦を検討する際にどのような阻害要因を経験しているか、また、それらは個人属性（年齢、性別、サッカー歴）とどのように関連しているか。

2. 研究方法

本研究では混合型の研究方法を用いた。上述したRQ1を明らかにするために半構造化インタビュー、RQ2を明らかにするために質問紙調査を用いた。混合型の研究方法を採用した理由として、RQ1に関しては、佐藤（2022）が報告しているように、在留ブラジル人の試合観戦者が少ないことから、質的調査として半構造化インタビューを実施することが阻害要因を明らかにするためには適切であると判断した。一方、RQ2に関しては、グランパスの試合観戦未経験者を調査対象者に含むことでより多くの在留ブラジル人のサンプルを確保できることから、先行研究（Yamashita & Harada, 2015）と同様に統計分析を用いて阻害要因と個人属性の関連性を検証するために質問紙調査を用いた。

2.1. 半構造化インタビュー（RQ1）

2.1.1. 調査方法

在留ブラジル人がグランパスの試合観戦において経

験する阻害要因を明らかにするために、半構造化インタビューを実施した。在留ブラジル人の知人を通じたスノーボールサンプリングにて調査参加希望者を募り、4 組の在留ブラジル人家族をグランパスのホームゲーム（於：豊田スタジアム）に招待した。調査は、2022 年 8 月 6 日（2 組）と 19 日（2 組）に、前半もしくは試合終了後にスタジアムコンコースへ移動して 1 組ずつ在留ブラジル人家族の保護者（計 7 名）を対象に 15 分程度で実施した。調査参加者の日本語能力が十分でない場合は、その子どもや夫婦のどちらかに通訳を依頼した。

2.1.2. 調査項目

半構造化インタビューにおける質問項目は、Tsai & Coleman（2013）の阻害要因を参考に、「1. 試合観戦を通して困ったこと（阻害要因）」、「2. 今後、グランパスに求めるサービス」の 2 項目を尋ねた。

2.1.3. 分析方法

Braun & Clarke（2006）を参考に、録音した音声データをもとにテーマ分析を行った。ポルトガル語での回答は、翻訳者に翻訳を依頼した。全てのインタビュー内容を文字に起こし、回答者の発言から阻害要因に関する言葉を抽出し、それぞれコード化を行った。そして、各コードから共通するテーマを生成した。

2.2. 質問紙調査（RQ2）

2.2.1. 調査方法

在留ブラジル人のグランパスの試合観戦における阻害要因と個人属性の関連性を明らかにするために質問紙調査を行った。調査は、在留ブラジル人を対象に保見団地内のブラジル人向けスーパーマーケット（2022 年 10 月 2 日、8 日の 2 日間）及びブラジル大統領選挙の在外投票所となったポートメッセなごや（2022 年 10 月 2 日）にて行った。質問紙調査は、直接配布・回収法にて実施した。配布した質問紙は、翻訳者によってポルトガル語に翻訳したものを使用した。回収数は 81 部であり、有効回答数は 76 部（スーパーマーケット 60 部、ポートメッセなごや 16 部）であった。

2.2.2. 調査項目

個人属性については、Yamashita & Harada（2015）と Matsuoka（2014）を参考に、年齢、性別、サッカー歴の 3 項目を尋ねた。また、阻害要因については Tsai & Coleman（2013）から、「アクセス」と「身体的」を除く 4 要因 16 項目を選定し、「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」の 5 段階尺度で回答を得た。阻害要因 4 要因 16 項目の選定理由として、「アクセス」には交通手段などの物理的なアクセスの阻害要因だけではなく、「提供されるプログラムがない」といった項目が含まれるが、本研究では試合観戦というプログラムが提供されることが前提であるため削除した。「身体的」の項目である「身体的問題」や「年齢」については、先行研究のような参加型スポーツ活動の場合には重要な阻害要因になると考えられるが、本研究の対象となる試合観戦においては身体的な負荷がそれほど大きくないことから除外した。加えて、グランパスの試合観戦の場面に合わせ、各項目の言葉を一部変更した。

2.2.3. 分析方法

まず始めに、阻害要因 16 項目の探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。Tsai & Coleman（2013）は新しい余暇・レジャー活動における阻害要因を対象としていたのに対し、本研究ではグランパスの試合観戦における阻害要因を対象としていたため、探索的因子分析による項目の再分類を行った。Tabachnick & Fidell（2007）を参考に因子負荷量の基準値を 0.55 とし、それ以下の項目は除外した。各要因の平均値と標準偏差を算出したのち、個人属性の 3 変数（年齢、性別、サッカー歴）を独立変数、各阻害要因を従属変数にした重回帰分析を行った。

3. 結果

3.1. 半構造化インタビューの結果

テーマ分析から、在留ブラジル人が経験した阻害要因として〈駐車場〉、〈乳幼児対応〉、〈飲食店〉の 3 コードを基にした「スタジアム環境」、〈スタジアム内〉と〈スタジアム外〉の 2 コードを基にした「言葉」、〈チケット購入〉、〈クラブ広報〉、〈ブラジル選手〉の 3 コードを基にした「情報の欠如」の 3 つのテーマが生成された。

「スタジアム環境」の 1 つ目のコードである〈駐車場〉については、「スタジアムにどういった配慮があると望ましいですか」という質問に対して、「駐車場」という回答が得られた。この回答者は、最寄り駅付近の駐車場に車を停めて徒歩で来場したため、「駐車場ないね、ここに」と観戦者用の一般駐車場がないことを指摘した。2 つ目のコードである〈乳幼児対応〉については、主にベビーカーの使用に関する問題であった。座席付近ではベビーカーの使用が禁止されているため、乳児を連れた父親は「赤ちゃんがいて、ベビーカーがダメだなと思ったら、やっぱりダメだった」と回答した。3 つ目のコードである〈飲食店〉については、「食べ物とかいろいろ楽しかったけど、列がすごく長かった」という回答があったように、飲食店で商品を購入する際

の混雑が不満として挙げられた。

「言葉」については、〈スタジアム内〉と〈スタジアム外〉の2つのコードが確認された。日本語をほとんど話すことができない妻とともに参加した男性は、「聞いたんですよね。『ここのこのチケット(席)どこですか』って。で説明してもらったんですけど、たぶん奥さん一人で来ていたらわからないですね」と回答し、座席の位置を確認したい時にポルトガル語対応スタッフがいないという、スタジアム内で生じる言葉の問題を指摘した。また、この男性はチケット購入サイトについて、「それ（チケット購入サイト）が、全部日本語だったら、読めない人は買えないとか。もしくは、友達に頼まないと難しいと思うんですよね」と回答し、スタジアム外においてポルトガル語翻訳がないことで生じる問題についての懸念を挙げた。

「情報の欠如」の1つ目のコードである〈チケット購入〉については、「チケット購入から試合観戦までで困ることはありますか」という質問に対し、「僕、購入する方法がちょっと分からなかったんですけど」や「そうですね。どうやって買うの？最近ね、2時間前に観に行こうかなって思って、どこで買うかちょっとわからない。チケットね。コンビニ？」という回答が得られ、チケットの購入方法を把握していないことから1つ目のコードを〈チケット購入〉とした。2つ目のコードである〈クラブ広報〉については、クラブが展開するプロモーションやサービスの情報が在留ブラジル人に行き届いていないことが明らかとなった。「今後グランパスに求めるサービスはありますか」という質問に対し、「できれば、軽くポルトガル語が入っていれば僕も宣伝できるんで。そこはちょっとまあ難しいのは分かっているんですけど、あればちょうどいいんじゃないんですかね」という回答が得られたが、この回答者はグランパスが公式ホームページでポルトガル語翻訳をしていることを知らなかった。最後に、3つ目のコードである〈ブラジル選手〉についは、次に試合観戦をする際に楽しみにすることとして「ブラジル人が、よく試合をする」という回答や、ファンになったかどうかについて、「カストロ。今日から（ファンになった)」と回答したように、今回の試合観戦を通して初めてブラジル選手の存在を認識したことが明らかとなった。つまり、ブラジル選手の情報が在留ブラジル人には行き届いていないことから、3つ目のコードを〈ブラジル選手〉とした。

なお、調査対象となった2試合の結果については、どちらもグランパスが勝利した。8月6日浦和レッズ戦のスコアは3対0であり、ブラジル選手は2名出場し、うち1点はブラジル選手のゴールであった。一方、8月19日ジュビロ磐田戦のスコアは1対0であり、ブラジル選手は3名出場し、ブラジル選手がゴールを決めた。

3.2. 質問紙調査の結果

質問紙調査のサンプル($N = 76$)の個人属性について、性別は男性が39名（51.3％)、女性が36名（47.4％)、無回答が1名（1.3％）であった。年齢は、18歳以下が8名（10.5％)、20歳代が9名（11.8％)、30歳代が12名（15.8％)、40歳代が18名（23.7％)、50歳代が16名（21.1％)、60歳以上が12名（15.8％)、無回答が1名（1.3％）であり、30歳代以上が多い結果となった。サッカー歴については、0年が34名(44.7％)、1～10年が18名(23.7％)、11～20年が5名(6.6％)、21～30年が2名（2.6％)、31年以上が4名（5.3％)、無回答が13名（17.1％）であり、サッカー未経験の人やサッカー歴の浅い人が多かった。

また、表1には阻害要因16項目の探索的因子分析の結果を示した。主因子法・プロマックス回転を用いて因子負荷量の基準値0.55以下の項目を除外した結果、4つの因子が生成された。因子1は、〈言葉の壁を感じる〉、〈スタジアム環境に対して嫌な思いをする〉、〈金銭的な余裕がない〉、〈文化の違いによって嫌な思いをする〉、〈人種的な理由によって嫌な思いをする〉という項目が集約されたことから、Tsai & Coleman (2013)の結果と同様に「社会文化」($M = 1.99$、$SD = 0.93$)と命名した。因子2は、〈豊田スタジアムでの観戦を楽しめそうにない〉、〈豊田スタジアムでの観戦が魅力的ではない〉、〈安心して観戦できない〉、〈豊田スタジアムでの観戦は重要ではない〉と言った観戦に対する心理的な項目が集約されたことから、「観戦」($M = 2.15$、$SD = 1.01$）と命名した。因子3は、〈グランパスファミリーという意識がない〉と〈一緒に行く人がいない〉という対人関係に関する2項目が集約されたことから「仲間」($M = 2.50$、$SD = 1.24$）と命名した。そして、因子4は〈仕事があるため時間がない〉と〈家庭の事情があるため時間がない〉という2項目が集約されたため「時間」($M = 2.82$、$SD = 1.21$)と命名した。「時間」阻害要因が最も高い平均値を示したが、どの因子も平均値は中間点（3　どちらでもない）よりも低かった。

最後に、表2には重回帰分析の結果を示した。重回帰分析の結果、「観戦」($F = 2.83, p < .05, R^2 = .08$)に有意差が認められたが、「社会文化」($F = 0.71, p > .05$）と「仲間」($F = 0.09, p > .05$）と「時間」($F = 0.15, p > .05$）に有意な値は認められなかった。「観戦」阻害要因に関して、男性は女性よりも高くなること（$\beta = 0.34, t = 2.52, p < .05$)，サッカー歴が長いほど低く

表1. 阻害要因16項目の探索的因子分析の結果

質問項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
「社会文化」: *M*＝1.99　*SD*＝0.93				
言葉の壁を感じる	.764			
スタジアム環境に対して嫌な思いをする	.752			
金銭的な余裕がない	.739			
文化の違いによって嫌な思いをする	.700			
人種的な理由によって嫌な思いをする	.685			
~~周囲とのコミュニケーションが難しい~~	~~.499~~			
~~受け入れられているという感覚がない~~	~~.493~~			
「観戦」: *M*＝2.15　*SD*＝1.01				
豊田スタジアムでの観戦を楽しめそうにない		.865		
豊田スタジアムでの観戦が魅力的ではない		.696		
安心して観戦できない		.675		
豊田スタジアムでの観戦は重要ではない		.654		
「仲間」: *M*＝2.50　*SD*＝1.24				
グランパスファミリーという意識がない			.931	
一緒に行く人がいない			.705	
「時間」: *M*＝2.82　*SD*＝1.21				
仕事や学校があるため時間がない				.914
家庭の事情があるため時間がない				.592
~~周囲の観戦者との交流が難しい~~				~~.515~~

表2. 重回帰分析の結果

	社会文化		観　戦		仲　間		時　間	
	β	t 値	β	t 値	β	t 値	β	t 値
年　齢	.127	.972	-.026	-.204	.037	.281	-.068	.515
性　別	.100	.712	.340	2.521*	-.022	-.155	.045	.317
サッカー歴	-.170	-1.213	-.290	-2.159*	-.044	-.306	-.036	-.251
R^2	-.014		.083		-.046		-.043	

* $p < .05$

なること（β = -0.29, t = -2.16, $p < .05$）が認められた。

4. 考察

4.1. RQ1：在留ブラジル人がグランパスの試合観戦においてどのような阻害要因を経験しているか。

テーマ分析から、「スタジアム環境」、「言葉」、「情報の欠如」の 3 つの阻害要因が明らかになった。「スタジアム環境」については、まず 1 つ目のコードとして〈駐車場〉が確認された。実際に、豊田スタジアムは駅から徒歩 20 分の位置にあり、観戦者が使用できる一般駐車場は提供されていない。本調査では、4 組すべての家族が車を利用し、最寄りの駅付近に駐車して徒歩で来場した。Rocha & Fleury（2017）においては、駐車場を見つけることの難しさや駐車場所からスタジアムまでの距離が長いことから「駐車場」阻害要因が報告

されている。また、日本のスタジアムは公共交通機関から離れた場所に建設されている場合が多いため、駐車場の問題は「交通」阻害要因において重要であることを Yamashita & Harada（2015）も指摘している。また、2 つ目のコードの〈乳幼児対応〉については、ベビーカーの使用に関する問題であった。スタジアムではベビーカーの使用が禁止されており、1 歳未満の子どもを連れた調査参加者は膝の上に子どもを乗せて観戦していた。グランパスは2021年より「ベビーカーファミリーシート」を販売し、インフォメーションにベビーカーを預けずに、そのままスタンドに乗り入れできる席種を設けている。しかし、電話受付のみの 17 区画限定販売であるため、利用には限りがある。ブラジルのサッカー観戦では、座席の不快感や座席から見える試合の景色に対する不満が「座席」阻害要因として報告されている通り（Rocha & Fleury, 2017）、サッカー観戦においてはベビーカーを含めた座席の使用に関する阻害要因が生じることが窺える。3 つ目のコードの〈飲食店〉については、商品を購入する際に列に並ぶことが不満として挙げられた。試合当日はスタジアムの場外に多くの屋台が出店しており、それらはモバイルオーダーで注文すれば並ばずに購入できる。しかし、スタジアム内の飲食店はモバイルオーダーを導入しておらず、混雑時には必ず列に並ぶ必要がある。Rocha & Fleury（2017）においても、「売店」阻害要因に「売店に長蛇の列ができる」という項目が含まれており、本研究の結果と一致する。また、Yamashita & Harada（2015）が提示する「スタジアム環境」阻害要因には飲食店に関する項目が含まれていないが、「トイレがとても混雑している」という項目が含まれている通り、スタジアム内で経験する混雑状況は観戦者にとって重要な阻害要因になり得ることが考えられる。本研究で明らかになった「スタジアム環境」という阻害要因は、Yamashita & Harada（2015）も報告しているように、日本人観戦者も感じる一般的な阻害要因である。しかし、マクロな視点からスタジアム環境を社会環境として捉えると、Tsai & Coleman（2013）が「社会環境によって嫌な思いをする」ことを「社会文化的」阻害要因と区分している通り、スタジアム環境も社会文化的阻害要因に当てはまると考えられる。例えば〈駐車場〉に関して、在留ブラジル人は母国のようにスタジアム付近に駐車場があると想定し、車で来場してしまう傾向にあることが報告されている（佐藤, 2022）。また、〈飲食店〉についても Rocha & Fleury（2017）の報告から、売店への長蛇な列への嫌悪感はブラジル人の方が日本人よりも、より強く感じるのかもしれない。

「言葉」については、〈スタジアム内〉と〈スタジアム外〉の 2 コードに分類された。〈スタジアム内〉に関しては、看板等のポルトガル語翻訳とスタジアムスタッフのポルトガル語対応が阻害要因として挙げられた。一方、〈スタジアム外〉では、試合観戦に至るまでの過程で、SNS やチケット購入サイトでのポルトガル語翻訳がないことで生じる問題が指摘された。これらの結果は、Tsai & Coleman（2013）が指摘する「社会文化的」阻害要因の項目である「言葉の壁」と一致し、在留ブラジル人特有の阻害要因であることが推測できる。また、上代ら（2016）の研究においても、イスラム系在日外国人がスポーツ活動における要望として「多言語の使用」を求めているという報告と一致する。これらのことから、在留外国人がスポーツ活動を含めた余暇活動を行う際には、その地域の公用語に対応することが重要であり、言語の違いが活動の参加を妨げる要因となることが窺える。ポルトガル語を母国語とする在留ブラジル人においても、スポーツ観戦ではチケット購入や場内アナウンス・サインにおいて日本語の理解が求められるため、困難な状況に直面している可能性が考えられる。

「情報の欠如」については、〈チケット購入〉、〈クラブ広報〉、〈ブラジル選手〉の 3 つのコードに分類された。まず、〈チケット購入〉について、2 組の調査参加者が購入方法を知らなかった。西尾ら（2013）の研究では、ホノルルマラソンに参加する際には申し込み方法等の「マラソン大会に関する情報不足」が阻害要因としてはたらくことが明らかにされている。Tsai & Coleman（2013）の研究においても、「アクセス」阻害要因に「関与の仕方が分からない」という項目が含まれている通り、余暇・レジャー活動に参加する際にはチケット購入や申し込みによる関与の仕方を把握していないことが阻害要因になると言える。その背景には、「言葉」阻害要因を指摘した男性の回答のように、言語の問題がチケット購入や申し込みの際にも生じる可能性が考えられる。また、〈クラブ広報〉については、グランパスが展開するブラジル人向けプロモーションの情報が在留ブラジル人に行き届いていないことが明らかとなった。そもそも、全ての調査参加者が過去に一度もグランパスの試合を観戦した経験がなかったため、グランパスの情報に触れる機会がほとんどなかったことが窺える。実際、「ブラジル人企画チケット」においては、その告知方法として、①ポルトガル語によるチラシや公式サイトの掲載、②豊田市やコリンチャンスサポーターの日本支部等にチラシ配布の協力依頼、の 2 種類の方法を用いているが、在留ブラジル人の来場者は少ない状況にある（佐藤，2022）。Tsai & Coleman（2013）においても、「アクセス」阻害要因に「何が利

用できるかわからない」と「読める／理解できる情報がない」という項目が含まれていることから、より多くのブラジル人に情報を浸透させることや理解しやすい情報発信の仕方を工夫する必要性が窺える。〈ブラジル選手〉については、所属するブラジル選手の存在を把握しておらず、試合観戦を通して初めて知ることが明らかとなった。2022 シーズンでは、4 名のブラジル選手がグランパスに所属しており、なかには 2022 J リーグ優秀選手賞を受賞するほど活躍する選手も在籍している。しかし、ブラジル選手の情報は在留ブラジル人には届いておらず、認知度が低い傾向にある。J リーグ観戦者の観戦動機について調査した中澤ら（2014）の研究では「選手への愛着」が重要な観戦動機として挙げられている。選手への特別な愛着を抱くことは観戦に参加する際に重要であるが、在留ブラジル人は同出身国のブラジル選手に関する情報にアクセスすることができておらず、阻害要因になっていることが考えられる。これらの「情報の欠如」の 3 コードは、Tsai & Coleman（2013）が指摘する「アクセス」阻害要因と一致する。特に、「何が利用できるかわからない」、「関与の仕方がわからない」、「読める／理解できる情報がない」といった項目があるように、情報アクセスの段階において阻害要因が生じているため、在留ブラジル人が試合情報や選手情報にアクセスしやすい環境を整備することの必要性が考えられる。

4.2. RQ2：在留ブラジル人が試合観戦を検討する際にどのような阻害要因を経験しているのか、また、それらは個人属性（年齢、性別、サッカー歴）とどのように関連しているか。

探索的因子分析から、在留ブラジル人が試合観戦を検討する際に直面する阻害要因として、「社会文化」、「観戦」、「仲間」、「時間」の 4 つの因子が明らかとなった。半構造化インタビューのテーマ分析から明らかになった「スタジアム環境」、「言葉」、「情報の欠如」とは異なる阻害要因が明らかになり、伊藤・河野（2021）が文脈による阻害要因の相違を指摘しているように、試合観戦中と試合観戦を検討する際に経験する阻害要因が異なることが認められた。

そして、重回帰分析の結果からは、「社会文化」、「仲間」、「時間」の阻害要因はいずれの個人属性とも有意な関連性が認められなかった。「社会文化的」阻害要因は、余暇活動に参加する際には重要度の低い阻害要因であることが明らかにされており（Tsai & Coleman, 2013）、本研究においても「社会文化」（e.g.,〈言葉の壁を感じる〉）が最も低い平均値を示した。これらは在留ブラジル人特有の阻害要因ではあるが、年齢、性別、サッカー歴にはあまり直接関係ない阻害要因であることが考えられる。「仲間」の項目には〈グランパスファミリーという意識がない〉と〈一緒に行く人がいない〉の 2 項目が含まれていたが、これまでグランパスが導入してきたプロモーションは年齢や性別など特定のターゲットに絞ったマーケティングを行っていないため、個人属性によるグランパスファミリーとしての意識の差が生じなかったと考える。また、インタビュー調査では全ての調査参加者が家族で来場し、休日の過ごし方については基本的に家族で過ごすと回答していたことから、在留ブラジル人は家族単位で行動する傾向にあることが窺える。愛知県豊田市のブラジル人人口が 6,687 人であるのに対して世帯数が 3,238 世帯であることからも（豊田市外国人データ集，2022）、多くの在留ブラジル人が家族と生活していることが窺える。そのため、在留ブラジル人にとって余暇を共にする家族がいることから、「仲間」阻害要因には有意な結果が認められなかったと考える。「時間」の項目には、〈仕事や学校があるため時間がない〉と〈家庭の事情があるため時間がない〉の 2 項目が含まれていたが、これらと個人属性には関連性が認められなかった。Yamashita & Harada（2015）では、「スケジュール」阻害要因において、年齢による有意な差はなかったが性別による有意な差が報告されていたため、本研究とは異なる結果であった。本研究では「時間」の平均値が最も高く、上代ら（2016）においてもイスラム系在日外国人がスポーツ活動を行う際に困ったこととして「時間がない」を最も挙げていたことから、在留ブラジル人は年齢、性別、サッカー歴に関係なく仕事や家庭の時間に追われ、試合観戦に時間を費やすことが難しい可能性が考えられる。

一方、「観戦」阻害要因には、性別とサッカー歴において有意な関連性が認められた。具体的に、サッカー歴が長いほど「観戦」阻害要因は低下することが明らかとなった。Casper & Menefee（2010）は、サッカー経験はその人のサッカーへの関心を高めることを明らかにしている。このことから、サッカー歴が長い在留ブラジル人ほどサッカーへの関心が高く、「観戦」阻害要因を低下させた可能性が考えられる。また、性別については、男性は女性に比べて「観戦」阻害要因が高いことが明らかとなった。この結果は、Yamashita & Harada（2015）において男性の方が「観戦」に対する心理的阻害要因が高かったことと一致する。しかし、グランパスの観戦者は男性の方が多いことから（男性 72.5％、女性が 27.5％：J リーグ，2019）、男性の方が「観戦」阻害要因は低いことが予想される。この相反する結果を検証するため、サッカー歴の性差についてフォ

ローアップ分析を行ったところ、男性（$M = 10.64$, $SD = 12.95$）は女性（$M = 1.97$, $SD = 6.40$）に比べてサッカー歴が有意に高いことが明らかになった（$t = -3.415$, $p < .01$）。つまり、男性の方がサッカー歴は長く、サッカーへの関心が高い男性の方が高い「観戦」阻害要因を感じているという結果となった。Rocha & Fleury（2017）によると、ブラジルのサッカー観戦においては、組織化されたファンクラブに属する熱狂的なサポーターがファンクラブに属さないファンの存在を嫌い、脅威を与える場合もある。そのため、ファンクラブサポーターの攻撃的な行動が観戦者にとって阻害要因になることを示唆しており、安全性を確保するためには、たまにしか来場しないファンや家族連れが観戦するための特別ゾーンを設けることが必要だと指摘している。これらより、サッカーへの関心が高い男性ほど、グランパスのファンではないことから安全性への懸念があり、試合観戦に対する魅力や意義を感じていないため「観戦」阻害要因が高くなった可能性が窺える。

5. 結論

本研究の目的は、在留ブラジル人がグランパスの試合観戦において経験する阻害要因を明らかにすること及び、試合観戦を検討する際に経験する阻害要因とそれらとの個人属性（年齢、性別、サッカー歴）の関連性を明らかにすることであった。半構造化インタビューの結果から、〈駐車場〉、〈乳幼児対応〉、〈飲食店〉に関する「スタジアム環境」、〈スタジアム内〉と〈スタジアム外〉での「言葉」、〈チケット購入〉、〈クラブ広報〉、〈ブラジル選手〉に関する「情報の欠如」の 3 つの阻害要因が明らかとなった。在留ブラジル人は一般駐車場がないことや飲食店の混雑など日本人観戦者においても直面する一般的な阻害要因に加えて、Tsai & Coleman（2013）が指摘する「社会文化的」阻害要因に直面することが窺える。また、質問紙調査の結果から、「社会文化」、「観戦」、「仲間」、「時間」の 4 つの阻害要因が確認され、「観戦」阻害要因においては女性よりも男性の方が高く、サッカー歴が長いほど低下することが明らかとなった。これらの 2 つの調査結果の共通点として、在留ブラジル人は移民であるが故に様々な阻害要因を経験していることが挙げられる。移民という社会的マイノリティな立場が在留ブラジル人特有の「社会文化」や「言葉」の阻害要因を生み出し、それらが原因となって「スタジアム環境」、「情報の欠如」、「観戦」、「仲間」、「時間」の阻害要因にも影響を与えたことが窺える。

今後、グランパスがより良いブラジル人向けサービスを展開するためには、本研究で明らかとなった阻害要因を解消し、よりターゲットを絞ったプロモーションを導入することが必要である。具体的には、Instagram や Twitter などの SNS におけるブラジル人専用アカウントの開始やスタジアムでのポルトガル語対応スタッフの配置をすることで「言葉」阻害要因を低減するとともに、これらのポルトガル語対応によって在留ブラジル人がグランパスの情報にアクセスしやすい環境をつくることで「情報の欠如」を解消することができる。また、J リーグはチケット購入サイトを「J リーグチケット」に統一している。全クラブの試合のチケットを統一するサイトであるため、ポルトガル語翻訳を導入することは難しい。そのため、在留ブラジル人がチケットを購入するための専用窓口をグランパスが独自で提供することが求められる。こういったサービスによって在留ブラジル人の観戦行動を促進することに加え、在留ブラジル人向けのサッカー教室や観戦ツアーを開催するなど、グランパスを通してサッカーに触れる機会の創出も必要である。その際に、ある程度サッカーへの関心をもつ男性を中心に呼び込み、日本サッカーの雰囲気や J リーグの安全性を体感してもらうことで「観戦」阻害要因の低下が期待できる。さらに、彼らの家族や友人も巻き込むことで在留ブラジル人のサッカーコミュニティを広げるとともに、「仲間」阻害要因を解消することもできる。そこにブラジル選手を派遣して交流を促進すれば、ブラジル選手を知るきっかけにもなり、観戦行動に繋がることが考えられる。

最後に、本研究における研究の限界について述べる。まずは、言語の問題である。半構造化インタビューでは、事前に日本語でのインタビューの可否について参加者に確認していたが、実際には通訳が必要な調査参加者がおり、質問の意味を正確に理解していたかどうか不透明な場合があった。研究内容を十分に把握した通訳者を介し、より詳細な阻害要因を聞き出すことが求められる。加えて、全ての調査参加者が子どもを含む家族であった。今後は、個人での観戦者や家族以外の同伴者と観戦するグループなどを対象にした調査が必要である。

質問紙調査では、サンプルの量と質の問題が挙げられる。サンプル数が不足した要因として、調査日時と調査場所が挙げられる。今回の調査場所であるスーパーマーケットとポートメッセなごやは在留ブラジル人の出入りが予測困難であり、予定していた調査日数で確実にサンプルを確保することが困難であった。今後は、在留ブラジル人で組織された団体やコミュニティに調査を依頼するなど、サンプルを確実に確保できる方法で行うことが求められる。サンプルの質については、

スーパーマーケットとポートメッセなごやの２つの会場で収集したデータを統合して分析したが、それぞれの会場によって平均年齢や居住地などに偏りが生じていた可能性が考えられる。さらに、質問項目の選定において、Tsai & Coleman（2013）から「アクセス」と「身体的」を除いたが、この判断について再検討する必要がある。半構造化インタビューでは「情報の欠如」が阻害要因として確認されており、情報へのアクセスの問題は在留ブラジル人にとって重要な阻害要因であった。また、最寄りの駅や駐車場からスタジアムまでの距離が長いことから、身体的負荷を伴うことが予測される。そのため、「アクセス」と「身体的」を質問項目に含めることで、新たな視点から個人属性と阻害要因の関連性を検討することが可能になると言える。

在留外国人への理解を深めることで、サッカーに限らずあらゆるプロスポーツチームにおけるイベントの多文化共生・多文化理解を実現し、余暇・レジャー活動の多様性を促進することが期待できる。本研究が、グランパスが目標とするサッカーを通した多文化共生の促進と在留ブラジル人サポーターの獲得に向けての一助となれば幸いである。

引用文献

愛知県（2022）愛知県内の市町村における外国人住民数の状況（2021 年 12 月末現在）. https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-2021-12.html（参照日 2022 年 12 月 9 日）

備前嘉文・二宮浩彰・庄子博人（2015）都市型市民マラソン大会への参加における制約とランニング活動動向の関係：個人内の制約と対人的制約からの検討. 生涯スポーツ学研究, 12（2）, 15-23.

備前嘉文・二宮浩彰・庄子博人（2016）市民マラソンランナーが都市型市民マラソン大会への参加を検討するにあたり生じる構造的制約. 生涯スポーツ学研究, 13（2）, 1-14.

Braun, V., & Clarke, V.（2006）Using thematic analysis in psychology. Qualitative Research in Psychology, 3, 77-101.

Casper, J. M., & Menefee, W. C.（2010）Prior sport participation and spectator sport consumption: Socialization and soccer. *European Sport Management Quarterly*, 10（5）, 595-611.

Crawford, D. W., & Godbey, G.（1987）Reconceptualizing barriers to family leisure. *Leisure Sciences*, 9（2）, 119-127.

伊藤央二・山口志郎・岡安功・北村薫・Walker, G. J.（2016）青年の野外レクリエーションの参加動機と阻害要因が野外レクリエーション参加に与える影響：日本とカナダの文化的類似・相違点の比較検討. 体育学研究, 61（1）, 11-27.

伊藤央二・河野慎太朗（2021）主観的類型に基づく日本人マスターズ大会参加者の阻害要因と阻害要因折衝. 生涯スポーツ学研究, 17（2）, 29-39.

伊藤央二・河野慎太朗（2022）自由時間における身体活動の阻害要因と阻害要因折衝：日本人と欧州系カナダ人の文化的類似性と相違性について. 生涯スポーツ学研究, 18（2）, 85-94.

Ito, E., Kono, S., & Walker, G. J.（2020）Development of Cross-Culturally Informed Leisure-Time Physical Activity Constraint and Constraint Negotiation Typologies: The Case of Japanese and Euro-Canadian Adults. *Leisure Science*, 42（5-6）, 411-429.

Jackson, E. L.（2000）Will research on leisure constraints still be relevant in the twenty-first century? *Journal of Leisure Research*, 32, 62-68.

Ｊリーグ（2019）Ｊリーグ観戦者調査サマリーレポート 2019（調査時期：2019 年 4 月 20 日～ 9 月 15 日）. https://aboutj.jleague.jp/corporate/wp-content/themes/j_corp/assets/pdf/funsurvey-2019.pdf（参照日 2022 年 12 月 9 日）

上代圭子・野川春夫・工藤康宏・秋吉遼子（2016）スポーツイベントを通したイスラム系在日外国人のスポーツ・ライフの調査研究：イスラム系在留資格者に対するスポーツ施策の基礎情報の収集. 2016 年度笹川スポーツ財団研究助成, 67-75.

Matsuoka, H.（2014）Consumer involvement in sport activities impacts their motivation for spectating. *Asian Sport Management Review*, 7, 99-115.

中澤眞・吉田政幸・岩村聡（2014）Ｊリーグ観戦者の動機因子：Ｊリーグ導入期における二次的データの検証. スポーツマネジメント研究, 6（1）, 17-35.

名古屋グランパス（2022）鯱の大祭典 2022. https://nagoya-grampus.jp/campaign/shachi2022/（参照日 2022 年 12 月 9 日）

名古屋グランパス（2020）名古屋グランパス、公式サイトへの WOVN.io 導入のお知らせ～日本にお住まいの外国人サポーターやインバウンドに向けたリアルタイムでの情報発信力強化へ～. https://nagoya-grampus.jp/news/pressrelease/2020/0216wovnio.php（参照日 2022 年 12 月 9 日）

名古屋グランパス（2022）リネットジャパン presents「鯱の大祭典 小中高 “全員” 招待」実施のお知ら

せ. https://nagoya-grampus.jp/news/pressrelease/2022/0606-presents.php（参照日 2022 年 12 月 9 日）
名古屋グランパス（2022）10/29（土）FC 東京戦｜「Thanks for your support 2022 ～チケット企画～」のお知らせ. https://nagoya-grampus.jp/news/ticket/2022/0922-1029fc-1.php（参照日 2022 年 12 月 9 日）
西尾建・岡本純也・石盛真徳（2013）参加型海外スポーツイベントにおけるアウトバンド・ツーリストの研究―ホノルルマラソン参加者の動機と制約要因についてー. スポーツ産業学研究 , 23（1）, 75-88.
Rocha, C. M., & Fleury, F. A.（2017）Attendance of Brazilian soccer games: the role of constraints and team identification. European Sport Management Quarterly, 17（4）, 485-505.
佐藤剛史（2022）「スポーツイベントが結ぶ地域における様々な人々」在留外国人の視点 . 日本生涯スポーツ学会第 24 回大会パネルディスカッション.
出入国在留管理庁（2022）令和 4 年 6 月末現在における在留外国人数について. https://www.moj.go.jp/isa/content/001381744.pdf（参照日 2022 年 12 月 9 日）
Tabachnick, B. G., & Fiidell, L. S.（2007）Using multivariate statistics（5th ed.）. Pearson Education.
Tsai, E. H., & Coleman, D. J.（2013）Leisure constraints of Chinese immigrants: An exploratory study. Society and Leisure, 22（1）, 243-264.
豊田市（2022）豊田市外国人データ集（令和 4 年 5 月 1 日 現 在）. https://www.city.toyota.aichi.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/004/767/25.pdf（参照日 2022 年 12 月 9 日）
山口志郎・松村浩貴・土肥隆・伊藤克広・舩越達也（2018）スポーツイベントボランティアの阻害要因：神戸マラソンにおける年齢，性別，および参加回数別による比較．生涯スポーツ学研究, 15（1）, 25-38.
Yamashita, R., & Hallmann, K.（2020）Interdependencies of structural constraints, attachment and behavioural intentions of sport spectators. *Managing Sport and Leisure,* 26（4）, 287-300.
Yamashita, R., & Harada, M.（2015）Constraints of sport spectators: The case of J. League Division 2 spectators. *Asian Sport Management Review*, 9, 37-54.